



糸川のライトアップ

熱海市長 齊藤 栄

令和3年度から行ってきた糸川遊歩道の景観整備事業が今年の3月末に完成します。今回の整備事業のポイントはライトアップによる光の演出です。

前回の糸川の整備事業は15年ほど前に行いました。さまざまな樹木が植えられていたのをあたま桜に統一することで、あたま桜の名所として生まれ変わったのはご存じの通りです。遊歩道沿いには明るさを抑えたライトを配置したのですが、今回時代に合わせて、いわゆるインスタ映えする照明に変えました。

具体的には、川の欄干に多数のLEDライトを配置し、あたま桜、ブーゲンビリアの開花の季節、あるいは花の無い時期に合わせ、色合いを単色、複数色、色が流れるパターンなどに変えることができます。また、開花した花を照らすライトも、欄干のLEDライトと連動して色を変化させることができます。

さらに、ドラゴン橋にシンボルオブジェ「未来の輪」を設置しました。今後、スマホで記念写真などが撮れるようフォトスタンドを設置し、SNSなどで情報発信されることにより、多くの方に注目される場所になることを期待しています。

糸川のライトアップで「夜の賑わい創出」を狙っています。コロナ禍後、昼間のお客様はだいぶ回復したものの、夜の飲食店などは厳しい状況が続いています。このライトアップを契機に、糸川周辺の飲食店等への誘客の取り組みを、事業者や地域の皆さんと企画、実行してまいります。



熱海駅開業100周年

熱海市長 齊藤 栄

令和7年3月25日、熱海駅は開業100周年を迎えます。「熱海の発展は鉄道の発展と共にあり！」これは私が常々感じていることです。が、鉄道と熱海の発展の歴史を振り返ってみればまさにその通りです。

まず熱海と小田原の間で、明治29年に人が客車を押す人車鉄道が、明治40年に蒸気機関で動く軽便鉄道が開通しました。そして100年前の大正14年に国鉄熱海線(国府津・熱海間)が開通し、熱海駅が現在の位置に誕生しました。昭和9年に丹那トンネルが開通し、東京からに加え関西方面からもお客様を迎えられるようになりました。さらに、東京オリンピック開催の昭和39年に東海道新幹線が熱海駅に停車。このように熱海は鉄道が発展するたびにより多くの来遊客を集め、全国有数の温泉観光地として発展してきました。

このような鉄道と熱海の発展の中で特に注目すべきは、昭和9年の丹那トンネルの開通です。それまでの東海道線のルートは箱根越えといわれるものでしたが、高低差が大きいため、大量の人とモノを速やかに運ぶことができませんでした。時の鉄道院総裁、後藤新平が大土木事業となる新路線の調査を命じ、数々の困難と16年に及ぶ難工事を経て丹那トンネルが完成。東海道線のルートが御殿場経由から熱海経由に替わることで、現在の日本列島の大動脈が誕生したのです。

熱海駅100周年の日には、こうした先人の偉業に感謝するとともに、熱海発展の歴史に思いを馳せようではありませんか。



令和7年度がスタートしました！

熱海市長 齊藤 栄

令和7年度がスタートしました。今年度は伊豆山被災地域の復旧・復興を加速するとともに、台風10号により被災した火葬場の早期の再開などに注力します。加えて、中長期的な視点で熱海市が持続的に発展する仕組みづくりを目指した「熱海2030ビジョン」の実現に力を入れてまいります。

「熱海2030ビジョン」の具体的な取り組みとしては、熱海観光をさらに活性化させるため、4月から1人1泊200円の宿泊税を導入するとともに、「熱海観光局」を始動させます。観光への投資には安定した財源の確保が必要不可欠であり、熱海観光局は、その財源を活用し官民協働による熱海観光の新たな司令塔として機能します。全国初となるこの仕組みにより、来遊客の満足度を高めるだけでなく、市民の皆様にも利益をもたらす観光施策を進めてまいります。

また、子育てに対する保護者の経済的負担を軽減するため、新年度から、市独自に0～2歳児の保育料の無償化を実施します。これにより、既に国により行われている3～5歳児の無償化と併せて、子どもの数や保護者の収入に関わらず、熱海のすべての子どもたちの保育料が原則無償化となります。加えて、0～2歳児を家庭で保育している世帯に「在宅育児応援金」を支給します。今後も引き続き、子育て支援策の充実を図ってまいります。

令和7年は昭和100年、熱海駅開業100周年と節目の年です。本年を熱海市の飛躍の年とすべく、以上の施策に全力で取り組んでまいります。



紙ごみ類の分別回収

熱海市長 齊藤 栄

先日、「熱海市脱炭素ロードマップ」を公表しました。これは二酸化炭素の排出量実質ゼロを目指し、2050年までに熱海市が行うべきことを示した工程表です。

行うべきことは多岐に渡りますが、まず2030年までに可燃ごみを30%削減することを目標としました。なぜなら、熱海市の一人当たりのごみの排出量は全国平均の約2倍だからです。もちろん熱海市が観光地であることも大きな要因ではありますが、生活系ごみ(家庭ごみ)も全国平均の約1.5倍です。

さらに熱海市の可燃ごみの内訳を調べてみると、紙・布類が37.8%と最も高く、紙ごみ類をいかに減らすかが大きなポイントであることが分かりました。

このため、熱海市では紙ごみ類の分別回収と再資源化(リサイクル)を検討中です。例えば、現在週3回の可燃ごみの収集日を見直し、1回を紙ごみ類に特化した回収に充てたいと考えています。これにより、これまで焼却場で燃やされていた紙ごみ類は、紙製品などにリサイクルすることができそうです。

もしこれが実現し、可燃ごみを30%削減できると、年間約2億円ごみの処分費も軽減できます。また、各ご家庭のごみの量が4割減れば、45リットル30円のごみ袋が30リットル20円で済むようになります。

具体的な紙ごみ類の出し方、種別、回収方法など多くの検討事項がありますが、令和7年度はモデル地区での試行により問題点を洗い出し、令和8年度から市内全域で行うことを目標に進めていきたいと考えております。

市長メッセージ

194



橋田壽賀子先生 生誕100年

熱海市長 齊藤 栄

先日、橋田文化財団主催の「橋田壽賀子生誕100年記念 第33回橋田賞受賞式」が東京で開催され、出席してまいりました。

ご存じの通り、橋田先生は50年近く熱海で執筆活動を続け、「おしん」や「渡る世間は鬼ばかり」で知られる文化勲章を受章した著名な脚本家です。

橋田賞は先生が放送文化の振興・向上に寄与した番組・作品・人に贈るもので、先生が亡くなった後も行われており、今回が33回目です。当日の受賞者は著名な番組や、脚本家、俳優ばかりでしたが、皆さんが「橋田賞をもらうことほど名誉なことはない」と言っていたのが印象的でした。

先生は非常に気さくで率直にモノを言う方でした。また、15年近く前に、先生の仕事場兼ご自宅で「広報あたみ」の新春対談を行ったのですが、今、当時の記事を読み返すと、先生の先見性に驚きます。常に次の時代を見据えて脚本を書かれていたことが分かります。

先生は熱海市の名誉市民でもあるのですが、名誉市民称号の贈呈日を6日後に控えた令和3年4月4日にご逝去され、先生がご存命中の贈呈がかなわなかったことは残念でなりません。

橋田先生のような偉大な業績を残した方が熱海市で活躍され、名誉市民であることは熱海市民の誇りです。熱海港を望む親水公園に先生の顕彰碑があります。ぜひ、一度足を運んでいただいて、先生のご遺徳を偲んでいただけたらと思います。

広報あたみ2025. 6月号掲載